

RC-MAP 廃棄削減にむけての提案

松崎 浩史

全国の医療機関で廃棄される血液量が、年間どれほどになるのか、誰も知らない。

一昨年、愛媛県と青森県で輸血用血液製剤の廃棄率が調査されたところ、病院の RC-MAP 廃棄率は両県共に平均 4.6% であった¹⁾²⁾。2005 年度には日本赤十字血液センターから 572 万単位の RC-MAP が医療機関に供給されていることから³⁾、もし、両県の RC-MAP 廃棄率が全国の平均値であったとするならば、一昨年の病院での RC-MAP 廃棄量は 26 万単位になる。

病院での RC-MAP 廃棄の多寡は、使用量に比べて購入量が多いか、RC-MAP の転用効率が悪いかによる。RC-MAP の使用量と購入量の差を少なくすることは、すなわち手術用 RC-MAP の準備量を制限することであり、それにはいくつかの有用な方法が知られている⁴⁾。しかし、一方で手術用 RC-MAP には適正な準備量として C/T 比 1.5 (未使用率 33%) 以下という基準が示されており、患者生命の安全のためには、RC-MAP の余剰と廃棄はある程度やむを得ないとも認識されている。

が、それにしても 26 万単位の RC-MAP 廃棄は、やむを得ないとして許される量なのだろうか？血液の供給を善意の献血に依存している以上、感覚的に、この廃棄量は許容されるレベルを超えているように思われる。

愛媛県の RC-MAP 廃棄状況を詳しく検討すると、RC-MAP 廃棄率は病院規模が小さくなるほど上昇し、病床数 500 床未満の病院の RC-MAP 購入量は病床数 500 床以上の病院の 0.78 倍しかないのに、廃棄量は 2.4 倍もあった (表 1)。本邦では輸血実施病院の 90% 以上が 500 床未満の中小病院であることを考えると⁵⁾、個々の病院の廃棄量が僅かでも、全体としては莫大な量の廃棄を生んでいると思われる。

そこで、本邦では血液センターが地域に密着しているという好ましい環境があることを利用して、よい廃棄削減対策が構築できるのではないかと考える。一案として、血液センターによる未使用 RC-MAP の回収、再利用を提案したいのだが、従来、この問題は血液返

表 1 病院規模と RC-MAP 廃棄量

	大規模病院	中・小規模病院
病院数	4	14
一般病床数	2,713	3,434
RC-MAP 購入量(単位)	26,414	20,648
RC-MAP 廃棄量(単位)	632	1,536

文献 2 より改変, 2005 年度, 愛媛県

品問題として日赤と病院間の経済問題と捉えられてきた。しかし、献血血液の有効利用という観点に立って、この問題を考え直すことはできないものだろうか？病院で廃棄される RC-MAP は、すぐにも使える検査合格済みの血液である。新たな献血者確保の労力や NAT を含む諸検査を省略できれば、未使用 RC-MAP の回収は血液センターにとっても利益のあることではないかと思考する。

院内で廃棄される RC-MAP が主として手術用に準備された RC-MAP であることは周知のことであり、血液準備量の少なかったことが訴訟の対象になりかねない昨今である。行き過ぎた RC-MAP 準備量の制限は安全な医療の危機でもある。安全な医療を支援することと献血血液の廃棄削減を両立させるために、日本輸血・細胞治療学会は、種々の困難な問題があるにしても新たな解決策を日本赤十字社や厚生労働省と共に検討するよう提案したい。

文 献

- 1) 立花直樹, 兎内謙始, 田中一人, 他: 青森県輸血療法委員会合同会議の活動状況 (第 2 報) ~ 適正使用と廃棄血減少への貢献について ~. 日本輸血学会雑誌, 52 : 316, 2006.
- 2) 松崎浩史: 愛媛県における輸血用血液の廃棄率調査からの考察. 日本輸血細胞治療学会誌 (投稿中)
- 3) (財) 血液製剤調査機構: 献血状況および輸血用血液製剤製造供給状況. 血液製剤調査機構だより, 93 : 2-4, 2006.
- 4) (財) 血液製剤調査機構 編集: 血液製剤の使用にあたって, 1. 血液製剤の使用指針, II 赤血球濃厚液の適正使用について, [注 2] 手術時の血液準備法について, 薬業時報社, 東京, 1999, 10-11.
- 5) 高野正義: わが国における血液製剤の平均的使用量に関する研究. 血液製剤調査機構だより, 85 : 1, 2005.